

宇治の鶉飼いと平等院

丹後 剛

宇治の鵜飼いと平等院（一）

平等院と鵜飼見物が、かねてからの妻の「ご所望」であり、連休を利用して宇治観光に出かけた。

平等院。なるほど端正で美しい建築物である。が、率直な第一印象をお許しいただけるなら、その規模のやや小であることに、驚かされた。著名な某と言う芸術家が、平等院をディズニーランドの城にたとえている。確か、あれは規模から来る壮麗さが重要なのではなく、現実の中であって、訪れる人に如何に夢を見てもらうのかが大切なのだというような趣旨だったと思う。言い得て妙、という気もしたが、やはりどうも適当ではない比喻だったような気もする。来世での救済と現在の楽しみという精神の向いた先が全く違う者たちの所産が、同一に論じられることに躊躇いを感じてしまう。平等院には、決してカタカナで現すことのできない、奥深い精神性や伝統、格式の高さ、誇り等々があるのだと、意地にさえなってしまう。

さておき、阿弥陀如来には、世の円満を造形するところなる、と言われても納得できるような印象を受けたし、雲中供養菩薩などは、本当に天上の歌舞音曲が聞こえてくるようで、実に興味深かった。できれば、何かの節目の年にでも、楽曲を再現してほしい、と思う。妻と天上音楽のイメージを口ずさみながら、平等院を後にし、宇治川の散策に向かった。

宇治の鵜飼いと平等院（二）

宇治川沿いを散策した。少しほてった肌に川風が心地よい。陽の落ちる頃になると鵜飼いがはじまった。黒々とした川面を火の粉をまき散らしながら漁り火が照らしつけている。十羽ほどの鵜を二人の鵜匠が巧みに操る。よく見ると潜って魚を捕らえている鵜もあれば、「仕事」をせずになんとか逃げようと抵抗を試みている鵜もある。

魚を捕らえても、喉元を縛られているので、飲み込むことはできない。それでも、獲物を捕まえた、という本能が満足させるのか、はたまた鵜飼いにうまく仕向けられるのか、鵜は魚を捕らえ続ける。

自由を求めて抵抗を試みる鵜も、喉元と羽の付け根のところで縄がしっかりと結ばれており、逃げることは叶わない。それでも、逃げようと試み続けている。

平等院とディズニーランドの城、将来の自由と幸せを求めて抵抗する鵜と目の前の獲物を捕らえ続ける鵜。なんだか妙なアナロジーができあがってきってしまった。

我が身に照らせば、どうなるだろう。今の自分は、将来のために投資をしているか、汲々として今だけを生きているのか。自分は、自由を求めてもがく鵜なのか、目の前の魚を虚しく捕らえ続ける鵜なのか。そして、鵜匠は何か。結局は、いろいろ考えずに家族のためにがんばることかなと思った時に、このとりとめもない思索のテーマを与えてくれた妻が、実はすべてお見通しの阿弥陀さまのように思えてきた。